

◆家族と社会化研究の課題

家族・宗教・社会化

青井和夫

1. 社会化

社会化の問題について私は、かつて「社会化再考⁽¹⁾」という論文の中でアイデンティティとインテグリティの関連を論じ、日本人のライフサイクルを、死後の過程まで含めた図1の如き円環⁽²⁾として表示しておいた。また、その後の『社会学原理』でも、

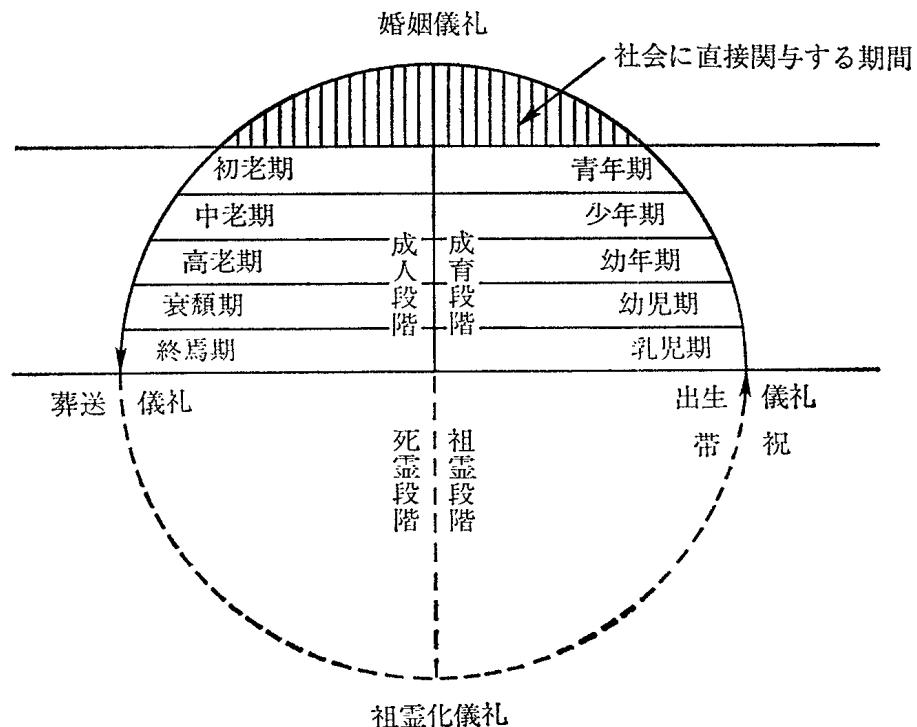


図1 日本人のライフサイクル

第1次および第2次社会化以後の社会化について、次のように論じたことがある。

「社会化は第2次社会化で終わるわけではない。かつては第1次社会化以外のすべての社会化を第2次社会化に含ませていたが、長寿社会の到来とともに老年期が長くなり、社会分化が進んでアイデンティティの確立が難しくなって、いつまでたっても人間が成熟期に達することができなくなり、成人社会化 (adult socialization) とか老年社会化 (elderly socialization) という概念の必要性も呼ばれるようになっている。……成人として、子どもや後輩を〈社会化する〉を立場になると、自ら進んで〈学習する〉という色彩が強くなり、社会の機能的要件の充足よりも、自分のパーソナリティの要求充足の方が大きくなって、過去を振り返りつつ、自己改造や自己変革をせざるをえなくなるのだ。ここに回顧的社会化 (retrospective socialization) とか相互社会化 (mutual socialization) とか再社会化 (resocialization) という概念の必要性が出てくる理由がある⁽³⁾」。

「しかし、これだけではない。老年社会化にはさらに新しい概念が必要だと私は考える。なぜなら、過去の社会化の結果を消去し、インテグリティ (integrity) の境地に到達するには、すべてを超越しなければならないからである。これを私は〈非社会化 desocialization〉または〈超越的社会化 transcendental socialization〉と名づけたい。……日本芸道（や武道）にいう〈守・破・離〉も碁や将棋の〈定石〉もこのたぐいであろう。新しい啓示を得るために、宗教家や芸術家（や武道家）が瞑想・独居・坐禅の中で思いをこらすのも、このためであった。日本の芸道や武道においては、まず流派の型を徹底的に身につけなければならない。しかし、社会化の最後の目標は、型を絶対的に身につけること〈守〉ではない。また型を打ち破って新しいものを創造すること〈破〉でもない。守ったことも破ったことも忘れて、型を乗り超え超越すること〈離〉でなければならない。これが日本人の理想であった。私が社会化の最後の段階を〈超越的社会化〉と名づけたのは、このような思いが込められていたのである。

こうして私の社会化の段階は、第1次社会化→第2次社会化→成人社会化→老年社会化という4段階となるのである⁽⁴⁾」。

2. 社会化をめぐる家族と宗教

ところで、「第1次社会化」の場面が家族（父母）であることは誰でも知っている。しかし、学校その他の教育諸機関の重要性がクローズアップされる「第2次社会化」においても、また職場と社会的活動を中心とする「成人社会化」においても、家族生活の重要性が低下するわけではない。出生家族から生殖家族に移り、そこで子を生み

家族・宗教・社会化

育てることによって、親自身もまた成長していくからである。「老年社会化（超越的社会化）」の場面ともなれば、再び職場と社会的活動から家族に帰りつくことは周知の事実であろう。

一神教の国に生まれたせいもあろうが、R. N. ベラーは、家族に劣らず、宗教のもう一つ社会化機能を重視する。周知の如く、T. パーソンズのAGIL理論によれば家族は全体社会のL機能を担当するものと考えられていたが、ベラーは、宗教もまた社会システムの「価値パターンの維持」と「緊張処理」を受けもつものとして、個人のパーソナリティと動機づけに深い関係をもっていると主張する⁽⁵⁾。そして、家族が個人のパーソナリティ的欲求とノーマルな生物学的欲求の充足に大きな機能を果たしているのに対し、宗教は人間としての究極的な欲求不満に対処する点がちがうだけだという。

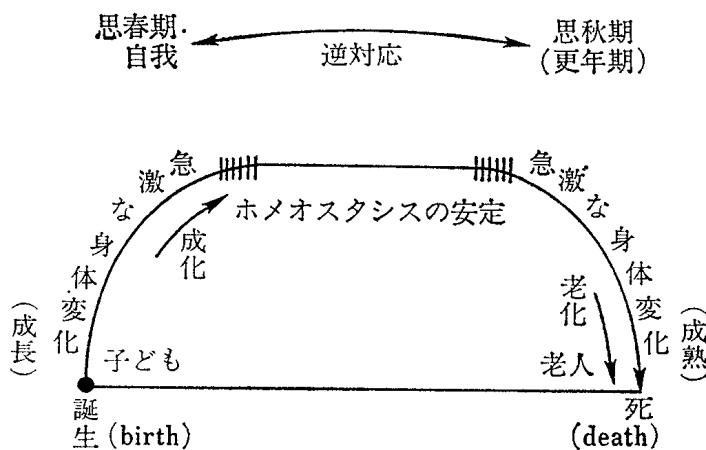
しかしながらベラーの場合には、宗教的救済のメカニズムを説明するのに心理療法のメカニズムを借用している節がある。たとえば、心理療法では、必要に応じてクライエントが社会化の一層初期の段階に退行することを許すように、宗教も、「古きよき時代」の段階に押しかえして、救済の実をあげているように思われると言っている点などが、これであろう。このような理論的立場からみれば、神との合一をめざす神秘主義(mysticism)はまさに「母子一体状態」の再来であり、礼拝主義(devotionalism)はまさに「母子の愛情的結合関係」への復帰であり、救済(salvation)は自分の野心を完全に放棄してお縋りするという「エディプス危機」への回帰だということになる⁽⁶⁾。

しかし、ベラーはここに留まってはいない。というのも、宗教は、パーソナリティ体系に対する家族の如く、緊張処理の機能をもつものとして社会システムのイド(欲求充足)に関係し、価値維持の機能をもつものとして社会システムの超自我(倫理)にも関係しているからである。前者の過程の典型として日常的な社会分化をあげ、後者の過程の典型として非日常的なカリスマ的革命をあげることができよう⁽⁷⁾。個人の発達過程(社会化過程)と社会システムの発展過程(成熟過程)とは、よく似たメカニズムにもとづいているのである。

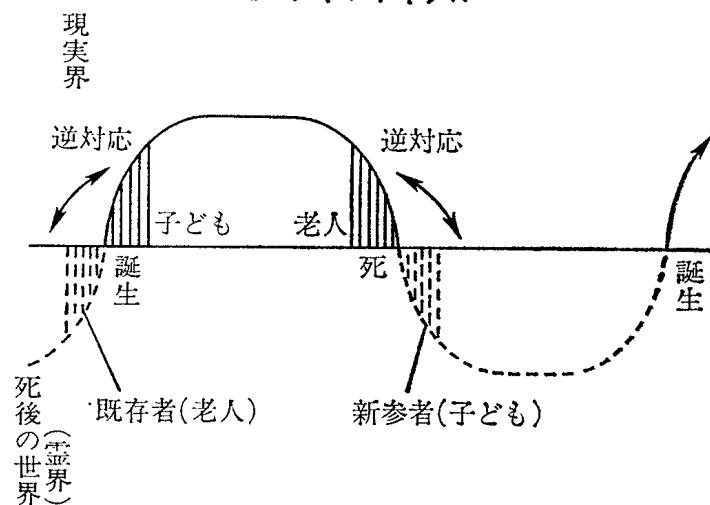
3. ライフサイクル

ところで、社会化の結果は、その人の死までを見とどけなければ判定できるものではない。いや、孫子の代まで見ないとほんとうのところは分からぬといいうのが、正しいのかも知れない。ここに、社会化とライフサイクルとの関連の問題が出てくるのである。

Ⓐ 唯物論的立場から見たライフサイクル



Ⓑ 再生説のライフサイクル



Ⓒ 祖靈説のライフサイクル

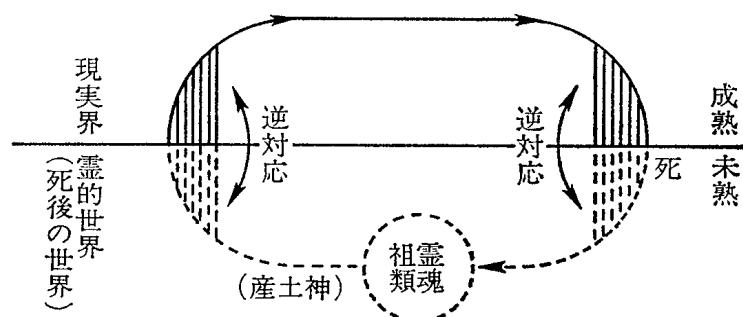


図2 ライフサイクルの3類型

(ⒶⒷⒸとも鎌田東二『翁童論』新曜社, 1988年, 69頁より引用した)

家族・宗教・社会化

鎌田東二によれば、ライフサイクルには三つの類型が区別される⁽⁸⁾。図2のⒶは唯物論的立場からみたライフサイクルで、身体の機能停止をもって個体存在の終焉だと考えるものである。これに対して、ⒷおよびⒸは死後の世界（靈的世界）の存在を前提とする図式である。

Ⓑの再生説にもとづくライフサイクルでは、現実世界での死は死後の世界（靈界）における誕生を意味している。つまり現実界と靈界とを総合的に考えた場合、現実界の老人は靈界における子どもという近未来の影をつねに持つており、逆に、現実界の子どもは靈界における老人という過去の影をもつていて。そこで、鎌田は老人と子どもをつらぬく存在性格を「翁童存在」と呼ぶのである。

以上の2類型に対して、Ⓒは日本の民俗的な世界観・死後観・靈魂観などを考えあわせながら画いた祖靈説でのライフサイクルの図である。ここでは祖靈という一種の類魂（グループ・ソウル）からの分靈化と再統合のプロセスが考えられている。死後、個人の靈魂はしだいに静まり、浄化して、祖靈というグループ・ソウル（仏・神）の中に入つてゆき、その加護の下に生まれてくる子どもを見守ると考えられているのである。

これが再生説の一種か、あるいは再生説に対立するものであるかについては、意見が分かれよう。というのも、柳田国男によれば⁽⁹⁾、輪廻転生思想の入つてくる前に、日本にも「生まれかわり」の思想があったからである。ただ日本の場合には、次のような特色があったといわれている。1)六道輪廻ではなくて、人間から人間への生まれかわりであること。2)魂が若返るためにこの世に再生して働くという、魂を若くする思想があり、生まれかわりは肯定的にとられていること。3)必ず同一の氏族か、血筋の末に生まれかわってくること。祖父が孫に生まれてくると考えられた時代もあったようである。

いずれにせよ、かつての日本の神話や昔話や民俗儀礼では、翁と童は、神界（靈界）と人間界、超越世界と現実世界を媒介する神人的存在と考えられていた。神々が老人や子どもの姿で、あるいはかれらを靈媒として出現していたのは、子どもと老人が死亡率の高い「神隠しに遇いやすい」不安定な存在であり⁽¹⁰⁾、性と労働という二つの基本的な生産行為から疎遠な、自由で、消費的・遊戯的存在であったせいかも知れない⁽¹¹⁾。

以上ⒶⒷⒸ三つのライフサイクル類型を並べてみると、前述の「社会化再考」という私の論文にある円環型のライフサイクル図式は、ここでのⒸ類型に入るものであった。

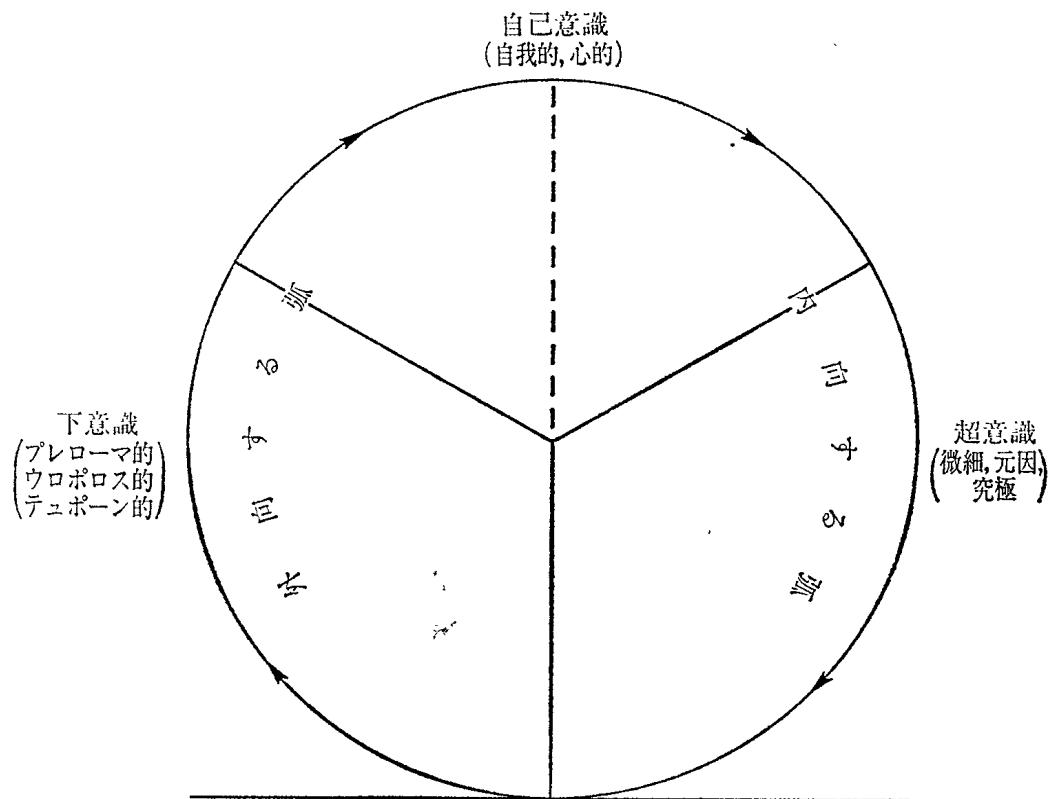


図3 一般的ライフサイクルの3段階

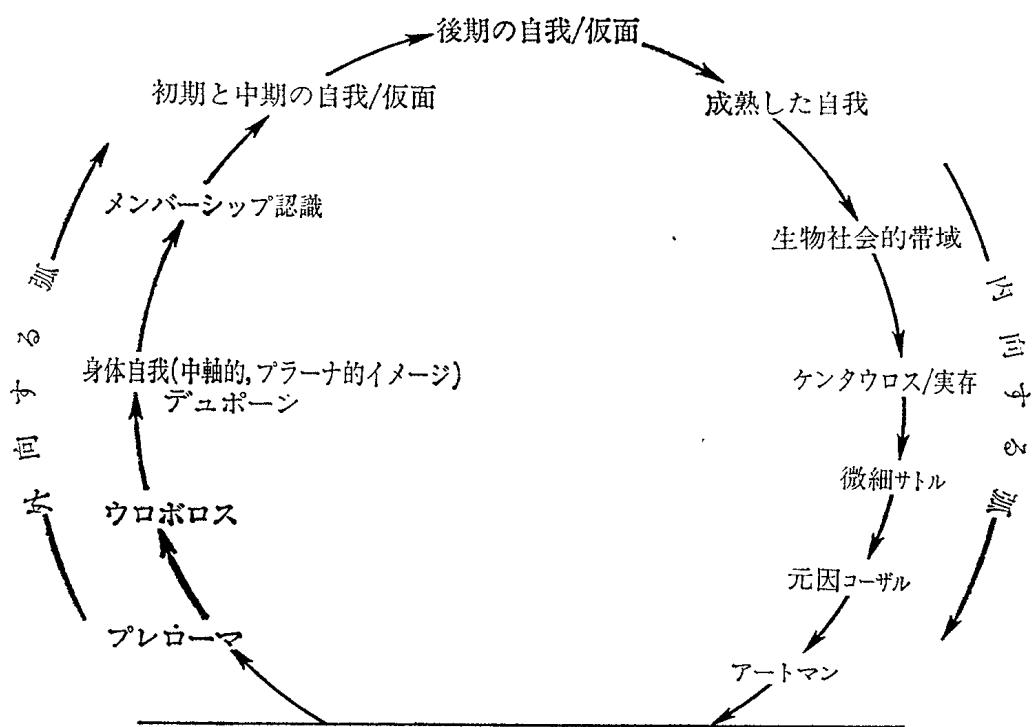


図4 完全なライフサイクルの内訳

4. 精神発達のトランスペーソナル理論

最近、K. ウィルバーの『アートマン・プロジェクト——精神発達のトランスペーソナル理論』を読み、そこに精神の進化・成長・発達図式が円環状に表示されているのを見て、私は驚いた。なぜなら、今までの欧米の進化や成長の図式のほとんどが一方的直線で画かれていたからである。

ウィルバーの本の基本的テーマは、「発達とは進化であり、進化とは超越であり、超越の最終ゴールはアートマンないし唯神における究極的統合的意識にほかならない」⁽¹²⁾というものである。つまり、アートマンとの合一が超越の目的だというわけである。ウィルバーによれば、人間の意識は大別して下意識(前意識)→自己意識→超意識へと発達していく(図3参照。紙面の都合上説明は省くが、より細かい段階は図4のようになる)。下意識は本能的・衝動的・前言語的であり、自己意識は自我的・観念的・言語的な意識である。これに対して、超意識は通常の心理学や社会学や教育学には出てこないが、超越的・超個人的・超言語的な意識をさしている⁽¹³⁾。

欧米では自己意識が意識の最高の形態で、東洋的宗教の重んずる超意識なるものを認めていない。だから、無垢と無知をいみする前状態(pre)と、悟りと目ざめをいみする超状態(trans)との区別をつけず、フロイトに従い、すべてを自己意識前の下意

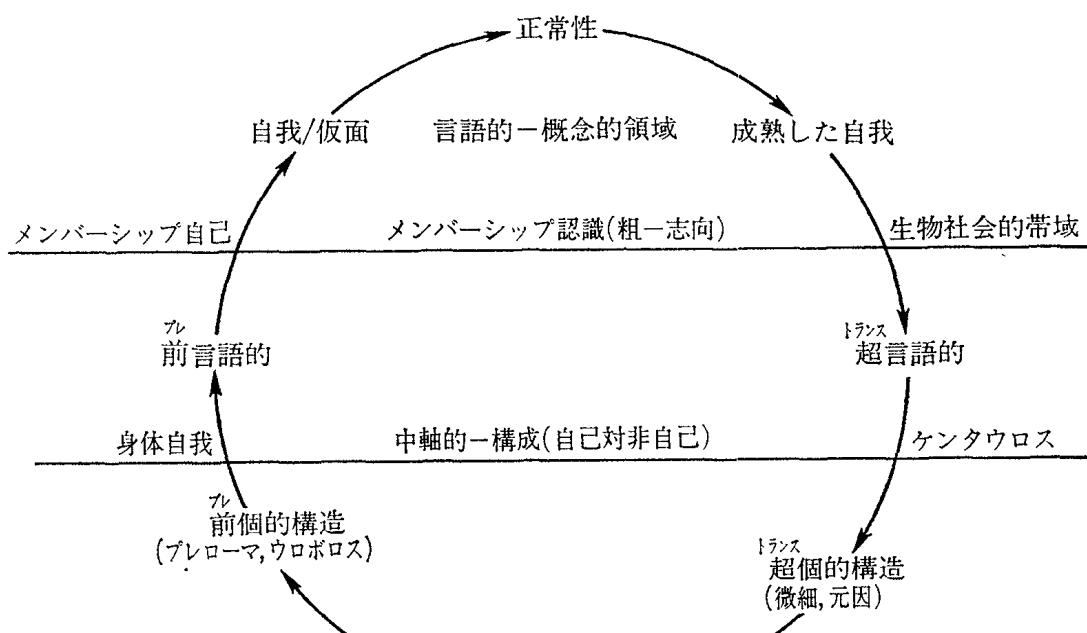


図5 ライフサイクルの要点：前 ^{pre} 対 ^{trans} 超

識（前意識）と考えたので、超意識への超出を前意識への退行と混同してしまった。だが、図4や図5にも示されているように、「外向する弧」に含まれていた前構造の多くが「内向する弧」においては超構造として発現するのであるから、たとえ表面的には類似していても、両者を同一視してはならないのである⁽¹⁴⁾。

ところで、これらの意識（自己感覚のあり方）の発達形式は、「自己を環境的対象物から分化することによって、自己は対象物を超越し、それを操作できるようになる」と要約できるだろう⁽¹⁵⁾。後のより複雑で、より統一された高次の意識レベルが、前より単純で、より低次の意識レベルを包摂するという形をとって進んでいくのである。これを時間の発達過程として表示してみると、次のようなになる。(1)完全に前時間的・非時間的な無時間→(2)直接的現在のみの時間（過去・現在・未来という線型時間ではなく、単純な現在しかない時間）→(3)過去・現在・未来からなる線型的・歴史的・構文法的・自我的時間→(4)ふたたび直接的現在のみの時間（だが(3)の線型的時間にも気付いている）→(5)真の超時間（無時間への回帰、すべての時間の根底に流れている永遠の現在。だが(3)の線型的時間にも(4)の直接的現在にも気付きながら、どちらにもとらわれない）。再び無時間に返るのであるが、それは超時間的・超空間的・超言語的・超個人的な無時間なのである⁽¹⁶⁾。

まとめ

欧米の心理療法は、自己意識の前状態と超状態とを区別せず、異常（abnormal）を正常（normal）にもたらそうと努力して、正常を正気（sane）だと錯覚していた⁽¹⁷⁾。だから異常の続発を防止することができないだけでなく、異常を根本的に治療することもできなかったのではあるまい。これからは、さらに老年期が長くなるので、超越領域ないしは正気領域の研究がますます重要となってくるにちがいない。それだけに、図1日本人のライフサイクル図式（これだけが逆時計回りで他の図式とちがっているが、お許しいただきたい）の「死後の世界」の部分を超越領域やプレローマ（第一次物質）と読みかえて、それを再構成する試みがあってもいいのではないか。

紙面の都合上、本稿ではそれへの予備的考察にとどめ、新しいライフサイクル図式の提示は別の機会にゆずりたい。

＜注＞

- (1) 青井和夫「社会化再考」（『教育社会学研究』第31集、1976年所収）。
- (2) 円環型の日本人のライフサイクルは、坪井洋文「人の一生」（大島建彦（編）『日本を知る辞典』社会思想社、1971年所収）から借用した。

家族・宗教・社会化

- (3) 青井和夫『社会学原理』サイエンス社, 1987年, 259頁。
- (4) 青井和夫『前掲書』, 259-260頁。
- (5) R.N. Bellah, *Beyond Belief—Essays on Religion in a Post-Traditional World*, Harper & Row, 1970, p. 275. T. パーソンズの場合には, 宗教は社会システムのG機能の中に入れられることもあった。
- (6) R.N. Bellah, *op. cit.*, p. 277.
- (7) R.N. Bellah, *op. cit.*, p. 279.
- (8) 鎌田東二『翁童論』新曜社, 1988年, 72-73頁。
- (9) 柳田国男「先祖の話」, 『定本柳田国男集』第10巻, 144-148頁。
- (10) 鎌田東二『前掲書』21頁。
- (11) 鎌田東二『前掲書』28頁。
- (12) K. Wilber, *The Atman Project*, The Theosophical Publishing House, 1980.
(K. ウィルバー『アートマン・プロジェクト——精神発達のトランスペーソナル理論』, 吉福伸逸・プラブッタ・菅靖彦訳, 春秋社, 1986年, はしがき, vi頁)。
- (13) K. ウィルバー『前掲訳書』7-9頁。
- (14) K. ウィルバー『前掲訳書』107-109頁。
- (15) K. ウィルバー『前掲訳書』45頁。
- (16) K. ウィルバー『前掲訳書』168-169頁。
- (17) K. ウィルバー『前掲訳書』338-340頁によれば, 彼は D. Cooper と同じく, 通常の成人の自我意識水準を「正常」の典型とみなし, 成人になっても前個的構造の意識(前意識)しかもてない者は「異常」(狂気)であると考えていた。これらに対して「正気」とは超個的構造の意識(超意識), いいかえれば「悟り」の境地に達した人をさすことばなのである。これら三者の位置関係は, 本論文の図5「ライフサイクルの要点: 前対超」をみよ。なお, K. ウィルバー『意識のスペクトル』I, 吉福伸逸・菅靖彦訳, 春秋社, 1985年, 285-286頁も参照せよ。